

私が生まれ育ったのは、秋田県の角館^{かくのたけ}です。星を見るのが好きな理科少年だった私は、当時林野庁に勤めていた母方の伯父に植物採集を習ったこともあり、自然に恵まれた環境で山や森林に親しんで育ちました。

32年前、当時創刊したアウトドア情報誌のメンバーとなったのも趣味が職業になったようなものでした。忙しいときは年間200日以上を取材に費やし、地球を二回り半するほど移動しながら、森でキャンプをし、川で釣りをし、自然観察をしていました。

緑のエッセー



そんな私が高校生たちに聞き書きを教えるようになったのは、平成14年のこと。私の本を讀んで、林野庁の方が訪ねてきてくれたのがきっかけです。日本の森林の人的資源を保護するため、森林の名手・名人を100人選んで表彰したいので、人選を手伝ってほしいという依頼でした。

しかし、私はただ紙一枚の賞状を贈るだけでは人的資源の保護にはつながらないと考え、いつか実現させようと温めていた「聞き書き甲子園」のアイデアを提供すると申し出ました。

と、2年目からは聞き書き甲子園の運営に参加してくれるようになったのです。

高校生が世代の違う知らない大人とつきあう決心をし、自ら取材の段取りをして、話を聞き、テープ起こしをして作品にまとめるのは大変なことです。それでも、聞き書き甲子園の参加者には、これまでひとりの脱落もなく、全員が最後までやり遂げています。

また、聞き書き甲子園で人名手たちから聞いた話を実践してみたいと、参加者たちが中心となって平成15年にNPO法人「共存の森ネット

●プロフィール

昭和22年、秋田県に生まれる。
東京理科大学理学部応用化学科卒業。芥川賞候補4回。
小説と職人の聞き書きを中心に執筆活動を行っている。法隆寺・薬師寺の棟梁であった西岡常一氏やその弟子の小川三夫氏、さらにその弟子の若者たちの聞き書き『木のいのち木のこころ』シリーズなど。第1回森の聞き書き甲子園から高校生の聞き書き指導にあたる。
【主な著書】
『手業に学べ』(心・技(ちくま文庫)、『木に学べ』(小学館)、『木のいのち木のこころ』(新潮文庫)など。

そのうちに、その情報誌で聞き書きを始めることになりました。聞き書きという形での取材

はこれが初めてで、最初に取材したのは、法隆寺や薬師寺などの復元を手がけた宮大工の西岡^{にしおか}常一^{つねかず}棟梁^{とうりやう}でした。このときに聞き書きした木や森林についての内容は、「木に学べ」という本で読むことができます。

以後も自然素材に関係する職業の人たちの聞き書きを続け、日本の森や山に関することを学びました。こうした聞き書きは現在「手業^{てわざ}に学べ」という本になっています。

毎年100人の高校生に私が責任を持って聞き書きを教え、100人の森の人名手の話を聞き書きして作品として残していく——これを10年続ければ1,000人分の記録となり、人的資源の保護としても、記録としてもかなり有効なのではないかと考えたのです。

実際に行ってみると、参加した高校生たちは森林に関わる自分のまったく知らない職業があることを知るとともに、人名手たちの知恵や経験に触れて感激してくれました。そして、その感動を次の年の参加者にも伝えていきたい

トワーク」を設立し、全国6地区7地域の農山漁村を拠点に活動しています。

現在、聞き書きによる学習は、インドネシアや中国でも行われつつあります。このネットワークがもつと広がり、高校生たちが聞き書きによる体験を通して世代間をつなぎ、森林に関する職業を知り、日本の基盤である第一次産業や環境問題についての知識を深めてくれることを願っています。